

《参考資料》

完成台本

学部教育教材

博物館学芸員の仕事 —考古学編—

「常 設 展 示」

VTR/26分57秒

□研究組織

—センター教官—

福井 康雄（教授・主査）

高橋 秀明（助教授）

芝崎 順司（助手）

宮本 友弘（助手）

—客員教官—

木下正史（東京学芸大学教授）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

永島正春（国立歴史民俗博物館教授）

—研究協力者—

安藤孝一（東京国立博物館学芸考古課長）

須藤 護（竜谷大学教授）

早川智明（埼玉県立博物館館長）

—長野県立歴史館—

市川健夫（館長）

関 孝一（学芸部長）

阿部 勇（総合情報課長）

宮下健司（学芸員）

平林 彰（学芸員）

綿田弘実（学芸員）

□ 基本資料

題 名	学部教育教材博物館学芸員の仕事—考古学編— 「常設展示」
制 作	メディア教育開発センター（大学共同利用機関）
制 作 協 力	NHK エデュケーショナル
上 映 時 間	26分57秒
原 版	D-3・2分の1テープ
撮 影	（第一回）平成8年10月5日（土） ※空撮 （第二回）平成8年11月17日（日）～18日（月） （第三回）平成8年11月26日（火）～30日（土） （第四回）平成9年1月31日（木） ※資料関係
本 編 集	平成9年2月12日（水）～23日（木）※制作棟V2 平成9年5月21日（水）※改訂版
録 音	平成9年3月14日（木） ※制作棟・RAスタジオ ※解説 中江真司（青二プロ）
完 成 試 写	平成9年3月21日（金）10時～12時

□ 画面の時間経過

(1) 開始タイトル制作・協力ー (12秒)	12秒
(2) プロローグ ー空から見た長野の景観ー (1分1秒)	1分13秒
	1分13秒
(3) 長野県立歴史館の概要 (1分32秒)	2分45秒
(4) 常設展示制作の経緯 (3分3秒)	5分48秒
(5) 常設展示の内容 (9分5秒)	14分53秒
(6) 「小テーマ展示」 (9分39秒)	24分32秒
(7) エピローグ (1分43秒)	26分15秒
(8) 終了タイトル (42秒)	26分57秒

音楽	効果	画面	時間	解説
M1		1 開始タイトル (12秒)		
		○制作・協力	(12秒)	
		2 プロローグ —空から見た長野の景観— (1分1秒)		
		<p>○長野県・鳥瞰 カメラが、更埴市のほうへと近づいていく。</p> <p>(OL)</p> <p>○歴史館位置図 更埴市に位置を示す。</p> <p>○空から見た森將軍塚古墳 T①W 「森將軍塚古墳」</p> <p>○空から見た長野県立歴史館 そこに重ねて— (OL)</p> <p>○メインタイトル 「常設展示」</p>	(1分13秒)	<p>N「山々に囲まれた長野県。この県内の各地域には、三万五千年前にも逆上る野尻湖遺跡をはじめとする数多くの先土器時代や縄文時代の遺跡が残され、この一帯で、太古の昔から、活発な人々の営みが行われていたことを伝えています。</p> <p>県内更埴市の森將軍塚古墳に隣接して建つ長野県立歴史館は、原始・古代から近現代に至る、長野県内の歴史的な文化財を収めた歴史博物館です。</p> <p>この博物館の常設展示を中心に、そこに係わる博物館学芸員の仕事について見ていくことにしましょう」</p>
3 長野県立歴史館の概要 (1分32秒)				
		<p>○歴史館・玄関 T②W 「長野県立歴史館」</p> <p>○館内・ロビー 賑わう人々 (OL)</p>		<p>N「長野県立歴史館は、埋蔵文化財資料や古文書などの史資料の収集、管理、調査研究を行うとともに、その展示や閲覧などの機能を備えた歴史博物館です。</p> <p>館の学芸部は、総合情報課、考古資料課、</p>

M2

- 歴史館組織図
- 廊下
進んでいく。
(OL)
- 博物館展示の資料
パンフレットや図録
などー

(WIPE)
- 常設展示の写真各種
の展示が迫ってくる。

(WIPE)

(2分
45秒)

文献資料課という三つのセクションに分かれて、いろいろな仕事をしていますが、展示は、総合情報課の仕事として行われています。

一般的に、博物館で行われる展示は、館で収集した資料を、体系的に、長期間展示する常設展示と、特定の主題に基づいて、館所蔵の資料や臨時に収集した資料を、一定の期間に限って展示する企画展示や特別展示とに分けられます。

常設展示には、いろいろなスタイルがありますが、いずれの場合も、それぞれの博物館の設立目的に沿ったメインテーマを表現するものだけに、その制作は、十分な計画と準備のもとに行われます。

では、長野県立歴史館の常設展示の制作は、どのような過程を経て、進められたのでしょうか？ その制作に係わった学芸員の一人に聞いてみました」

4 常設展示制作の経緯

(3分3秒)

- 館内一学芸部
・考古資料課
語る宮下学芸員
T③W
「長野県立歴史館」
- 館内・ロビー
賑わう人々ー
(OL)
- 歴史館組織図
- 廊下
進んでいく。
(OL)

N「長野県立歴史館は、埋蔵文化財資料や古文書などの史資料の収集、管理、調査研究を行うとともに、その展示や閲覧などの機能を備えた歴史博物館です。

館の学芸部は、総合情報課、考古資料課、文献資料課という三つのセクションに分かれて、いろいろな仕事をしていますが、展示は、総合情報課の仕事として行われています。

M2

<p>○博物館展示の資料 パンフレットや図録 などー</p> <p>(WIPE)</p> <p>○常設展示の写真 各種の展示が迫って くる。</p> <p>(WIPE)</p>	<p>(2分 45秒)</p>	<p>一般的に、博物館で行われる展示は、館で収集した資料を、体系的に、長期間展示する常設展示と、特定の主題に基づいて、館所蔵の資料や臨時に収集した資料を、一定の期間に限って展示する企画展示や特別展示とに分けられます。</p> <p>常設展示には、いろいろなスタイルがありますが、いずれの場合も、それぞれの博物館の設立目的に沿ったメインテーマを表現するものだけに、その制作は、十分な計画と準備のもとに行われます。</p> <p>では、長野県立歴史館の常設展示の制作は、どのような過程を経て、進められたのでしょうか？ その制作に係わった学芸員の一人に聞いてみました」</p>
--	---------------------	---

4	常設展示制作の経緯	(3分3秒)
---	-----------	--------

<p>○館内一学芸部 ・考古資料課 語る宮下学芸員 T③W 「学芸員 宮下健司 (考古担当)」</p> <p>T④W 「周辺展示」</p>		<p>学芸員の話「…長野県は、一つの文化レベルとして、非常に博物館の数が多いということがよくいわれていまして、そういう中で、市町村の博物館が先行して出来て、われわれ県立の施設が最後になったと…そういうことで、市町村と同じような展示方法をとってもしようがないだろうということですね、新たな考え方のものにですね、常設展示を考えたわけですね。一つの大きな特色はですね、見て・触れて・体感してということで、見学者がですね、展示場の中に入り込んでいって、そして、見て・触れて・体感するという、これが、一番の大きな特色になっています。で、ここで歴史の世界にですね。興味関心をもっていただいて、それで、もっと深く知りたいという人がですね、今度、周辺にあります、個々の展示物が展示してありますが、これを周辺展示というふうに位置づけています。これより深く見てもらうと…それから、もう一つ、さらに深まってですね、専門的に学習をしたいという人はですね、それぞれの</p>
---	--	--

	<p>T⑤W 「マルチメディア検索」</p> <p>(WIPE) (4分42秒)</p> <p>○常設展示構成総覧 繰られていく。</p> <p>象のスケッチに重ねて—</p> <p>(OL)</p> <p>○ナウマン象の制作過程の写真</p> <p>○植毛された象の皮膚の模型</p> <p>(WIPE)</p> <p>○縄文の村の設計図</p> <p>(OL)</p> <p>○竪穴住居の制作過程の写真</p> <p>(WIPE) (5分48秒)</p>		<p>コーナーにマルチメディアが設置してありますので、それで検索することによってですね、一つのマルチメディアで、三百から四百項目くらいの内容が引けると…まあ、そういう三段階ですね、展示が深まるような構成をとっております」</p> <p>N「こうして、体感型の、動的で、しかも感動のある展示を一という基本方針が固まったところで、展示の構成案が作成され、それを、具体化していくための作業が始まりました。</p> <p>先史時代のコーナーでは、ナウマン象の復元が計画されました。</p> <p>模型の制作に当たっては、目や首が動き、しかも、手で触ることが出来るものという、これまでにないリアルな展示を実現するために、皮膚の部分に植毛をした硬質ウレタンを使うなど、さまざまな工夫が凝らされました。</p> <p>縄文のムラは、やってきた人が、まるで、その時代の村に、タイムスリップしたような感じをもてるようにと企画された展示です。</p> <p>その制作に当たっては、実際の長野県内の遺跡をモデルとして、これまでの研究成果を生かしながら、ある縄文のムラの人々の暮らしぶりを浮かび上がらせるために、数々の努力が重ねられました。</p> <p>こうして、長野県立歴史館の常設展示は、多くの人々の手で、長い準備の期間を経た後に、完成したのでした。</p> <p>では、この常設展示のねらいは、どのような形に具体化されたのでしょうか？」</p>
5	常設展示の内容		(9分5秒)
	<p>○常設展示室—入口見 学者がやってくる。</p> <p>○常設展示室—内部</p>		<p>N「常設展示のオープニングは、木曾ヒノキと長野県の歴史をめぐる展示です」</p>

・赤沢自然休養林
学芸員を囲んで解説
を聞く人々

T⑥W

「解説：
綿田 弘実」

T⑦W

「赤沢自然休養林」

・年輪年代コーナーで
の解説

T⑧W

「年輪年代学」

(WIPE)

・ナウマン象のコー
ナーでの解説

T⑨W

「原始時代 中テーマ
展示『ナウマンゾウ
と黒曜石』

動くナウマン象の模
型

学芸員の話「この館の常設展示の統一テーマが、信濃の風土と歴史というテーマになっています。それで、信濃の風土を、一番象徴的に語っているのが何かといたら、やっぱり、木曾ヒノキなんですね。吉野の杉とか秋田杉と並んで、日本三大美林ということで、全部、今、国有林になっています。ここは、その中の赤沢休養林の初夏のようすを、実物大で再現しております。実際にヒノキの中に入った感じを味わっていただくということで、よくこうね、気をつけて匂いを嗅いでいただくと、ヒノキの匂いがしている筈なんですけれど、いかがでしょうか…

…それでね、今、木曾ヒノキを見ていただいたんですが、実は、このヒノキというのは、歴史の研究に、とても縁が深いわけなんです。といたしますのがね、今、年輪年代学という針葉樹の年輪の成長の幅によって、実際の年代を割り出すと、そういう方法があるのですが、実は、その研究の開発が出来たのは、この木曾ヒノキがあったおかげなんですね。あのう、植物の成長といいますのは、針葉樹の場合はね、一年成長すると、その年輪が出来るわけなんですけれども、寒い年はやっぱり成長が小さいし、暖かい年は、沢山成長するわけなんですね…

…当時っていうのは、永河時代と呼ばれる、火山なんか噴火しましてね、とても寒冷な気候だったんですね。野尻湖あたりが、今の志賀高原くらいの気候だったと…」

N「オープニングに続く原始時代のコーナーでは、まず、ナウマン象の復元模型が登場します…」

学芸員の話「…この象は牡のナウマンなんですけれども、高さが二・七メートルで、全長が三・七メートルで、推定される体重が約四トンと非常に大きな象ですね。この足跡なんかもね、発掘調査で出てきた足跡の

(7分
46秒)

M3	犬の 声 鳥の 羽音	<p>(WIPE)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看板〈中央高地の縄文文化〉 ・縄文のムラ 床面から全景へパン — <p>《竪穴住居の前》 — 解説が続く。</p> <p>T⑩W 「縄文のムラ—実物大環境復元—」</p> <p>T⑩W 「阿久遺跡（原村）」</p> <p>《紅葉した木立》 赤トンボやタヌキなどの姿も見える。</p> <p>《ムラの広場》</p> <p>《高床建物》 T⑩W 「高床建物」</p> <p>《竪穴住居》 ・外部</p>	(8分 36秒)	<p>化石を復元しているまけなんです。そちらの近くの方、触ってもらってもいいんですけども—どうですか、感じは？ ね、柔らかいでしょう、象さんのような感じでしょう…」</p> <p>N「床が、土の地面が変わると、そこには、縄文の村が広がります」</p> <p>学芸員の話「…ここが、森の中の中央高地の縄文文化といわれる、縄文時代のところなんです。あのね、さっきヒノキのところでもお話ししたように、実大環境復元という、実際に大きさや感じを味わっていただくために、こういう復元をしたのですけれども…この舞台になっているのが、八ヶ岳山麓の原村にあります阿久遺跡という遺跡の調査結果に基づいています。原村ですからね、斜面が、八ヶ岳の裾野が、西に向かって傾斜しているということになります。今はね、ここは、十月の半ば頃、午後の四時半頃の設定になっています。周りが暗いのは、そのせいなんですけれどもね。八ヶ岳に西日が当たっているわけなんです」</p> <p>N「凡そ約五五〇〇年前の、中央高地の、ある晩秋の夕暮れの縄文のムラという設定で作られたこの展示には縄文文化についての最新の研究の成果が、さまざまな形で取り入れられています。</p> <p>祈りや祭りに使われたものとされる立石や列石や集石などがあるムラの広場—</p> <p>祭りや集会のときなど、人々が集まったものと想像される、掘っ建て柱の高床建物—</p> <p>そして、夫婦と息子と娘の四大家族が住んでいたという設定で復元された、半地下式</p>
----	-------------------------	---	-------------	--

T⑬W

「竪穴住居」

・内部
天井や床面などの諸
道具—

解説者の話が続く。

T⑭W

「想定家族構成

夫25歳・妻23歳・息
子6歳・娘3歳」

さまざまな食べ物—

蒲の敷物—

土器の貯蔵品—

獣の毛皮や骨など—

の竪穴住居—

その内部には、当時の人々の暮らしぶりを伝えるさまざまな用具も、復元して展示されています」

学芸員の話「…これが、竪穴住居に、今、入っていただいたところです。この竪穴住居は、実際に阿久遺跡の発掘で出てきた三十四号というお家があるんですけどね、五千五百年くらい前の。実際はそのお家のプランから設計したものです。今ね、縄文時代の一軒の家に、どのくらい人が住んだという研究に基づきまして、凡そ四人くらいだろうと、で、この家の旦那、お父さんが二十五歳くらい、お母さんは二十三歳くらいで、六歳の男の子と三歳の女の子がいるくらいのお家の道具だと、そういう風に復元しています。…で、今は、秋の夕方ですのですね。男の家族は、狩りから獲物を背負って帰ってくる途中、女の家族は、川へ水汲みにいっていると、だから、ここには人がいないんだと…

それで、今は、秋の時期ですので、この食卓にのっている食べ物なんか秋の味覚が揃っております。ええ、山ブドウとか、ユリの根もありますね。それからアケビ、それからこれは、クッキー状の木の実ですかね。それからドングリの類い、それから、ここには、なんでしょうね、これ、猪の肉と、木の実で作った団子とキノコと、干したゼンマイなんか入ってますね。まあ、ごった煮風の食事だと…

あのう、ここに敷いてある敷物ですけど、これはね、蒲なんです、蒲ね。それから、こちらのほうですけどもね、奥のほうの土器には、クルミが沢山貯蔵されています。丁度、収穫の後ですのですね。クルミが沢山…山栗もあります。それから、あのう、植物の蔓も、非常に大事な…」

N「…このように、この常設展示は、まず、情景再構成手法による実物大の環境復元によって、見学者が展示の中に入り込んで、見て・触れて・体感することを第一の特徴

	<p>(WIPE)</p> <p>・周辺展示 見る人ター T⑩W 「原始時代 中テーマ 展示〈中央高地の縄 文文化〉」</p> <p>展示された土器や土 偶、骨角器などー</p> <p>復原された北村人</p> <p>AV 設備 操作する人ター</p>	<p>(12分 33秒)</p>	<p>としています。</p> <p>そして、メインとなる環境復元の展示の周 辺には、第二世代の展示ともいうべき、収 集資料を中心とした、従来型の展示が設置 されているのです。</p> <p>かつて、長野県内の各地域で展開された縄 文人のくらしぶりを、今に伝える出土資料 のかずかずー</p> <p>展示資料の中には、このように、出土した 人骨をもとに復原された縄文人の女性の姿 もみられます。</p>
	<p>(WIPE)</p> <p>○弥生時代のコーナー T⑩W 「原始時代 中テーマ 展示〈稲をつくった 信濃びと〉」</p> <p>○古墳時代のコーナー 「原始時代 中テーマ 展示〈古墳に葬られ た人びと〉」</p> <p>(OL)</p> <p>○イラスト 常設展示室平面図</p>	<p>(13分 36秒)</p>	<p>また、各コーナーには、かならず、オーディ オビジュアル設備が設けられ、来観者が、自 分で検索をしながら、展示資料に関する 映像情報を得ることが出来るようになって います。</p> <p>縄文時代に続く弥生時代の展示ー</p> <p>古墳時代の展示ー このように、過去を追体験出来る実物大の 環境復原展示を核として、そこに、テーマ に沿って学習出来る周辺展示やオーディオ ビジュアル設備による映像情報などを加え ていながら《信濃の風土がはぐくんだ原 始の生活》というメインテーマを立体的に 展開していこうというのが、この常設展示 のねらいといえるでしょう。</p> <p>テーマによって、絶えず、展示内容の変わ る企画展示と異なって、常設展示は、半恒 久的に展示することが原則となっていま す。しかし、その内容が、いくら長期にわ</p>

	(WIPE)	(14分 53秒)	たる展示に耐えられるように作られているとしても、絶えず、新しい調査研究の成果を取り入れた展示の手直しは不可欠です。そのために行われるのが、学芸員による展示替えの作業です」
6	「小テーマ展示」の企画と制作		(9分39秒)
○学芸部一会議室 原始部門の時代別研究会が行われている。 T⑦W 「原始時代別研究会」 会議の資料— (OL) ○イラスト ローテーション展示— 展示替えの部分の文字が、次々に変わっていく。 展示替え後の全体構成 (WIPE)	N「原始時代担当の学芸員たちが、新しい展示替えのための打ち合わせをしています。 この歴史館では、毎年、常設展示の各時代のコーナーの展示替えを長期的な計画のもとに、ローテーションを組んで行っていますが、今、原始時代のコーナーで進められようとしているのは、《ナウマン象と黒曜石》、《稲をつくった信濃人》、《古墳に葬られた人々》という三つの中テーマに連なる、小テーマの部分の展示替えです。 このように、大テーマや中テーマは、そのままに固定化しておいて、小テーマの部分の定期的な展示替えすることによって、とかく、マンネリになりがちな常設展示を活性化していこうというのが、このローテーション展示のねらいです。 では、小テーマの展示替えは、どのように行われていくのか、《科野の馬と武人》の展示の場合を例に、具体的な内容を、担当の学芸員の話聞きながら、見ていくことにしましょう。		
○インタビューに答える学芸員 (展示替えのねらい—) T⑧W 「学芸員 平林彰 (考古担当)」	(16分 31秒)	学芸員の話「…うちの古墳時代の中テーマというのは、古墳に葬られた人びとというのをテーマにしています。まあ、その中でいくつかの小テーマがありまして、以前はどちらかという古い時代、まあ、古墳時代でいいますと前期という時代をメインにし	

○調査諸資料
研究報告や関連書籍
などー

馬具一覧ー

(OL)

○語り続ける学芸員

T⑱W
「妙前大塚古墳」

まして、ええ、この上にあります森將軍塚古墳、それから川柳將軍塚古墳、そういった比較的古手の資料を置いていたんですね。で、次にじゃあ、丁度古墳時代の中頃、丁度馬が信州にもたらされた頃が、古墳時代中期といわれておりますので、時代的にも新しい、目先の変った展示をしたほうが面白いのじゃあないかということで、テーマとして、今回のテーマに落ち着いてきたという…」

N「こうして、テーマが決まったところで、担当の学芸員は、まず、関連する資料の調査を行い、展示についての具体的なイメージを固めていきます」

学芸員の話「…だいたい、まあ、五世紀の後半から六世紀前半の県内の馬具をとりあえず集成いたしまして、で、その中から、今回の展示に不足するような資料を補っていくと…まあ、これ馬の道具のほうはいいんですけども、今度は、その馬を操る側の人間の問題が出てきます…

その当時の人間といいますと、当然、その古墳に葬られた主人公のほうメインになってきますけれども、当時の古墳には武器の類いですね、副葬されるものが多いということで、まあ、ほとんど同じ時期の今度、飯田地方に行ってみまして、武器を沢山発見されている妙前大塚古墳の資料を中心にですね、武器、それから武具ですね、鎧・甲冑などを併せて展示すると、というような形で資料を揃えました。ただ、一般の方にはですね、昔の道具ですので馴染みが少ないんですね。それを、なんとかこう一般の人が、ふむ、なるほどこういう風に使ったんだということを分かってもらわなくてはいけない。そこで考えたのが、実物大の模型の製作ということになります。ただ、こうなると、今度、その人そのもの、馬そのものを調査しなくてはいけない。古墳時代の人というのは、一体、どれくらいの大きさなのか。あるいは、馬は、どのくらいの大きさで形なのか。そこでまあ、古墳から発掘されている人骨等の資料をもとに

車音	(OL)	○展示シナリオ	(19分 34秒)	すね、当時の人の体型を考える。それから、馬については、まあ信州の場合は在来馬として木曾馬がありますので、その調査をしまして、馬のモデルの選定をしました」
	○展示資料リスト	N「展示のイメージが具体化してきたところで、展示シナリオが作られます。そして、学芸員たちは、そのシナリオに沿って、さらに、詳しい調査を続けていきます。		
	(WIPE)	○道 学芸員の車が走る。	今回の展示のポイントの一つは、信州の在来馬である木曾馬の復元模型を作ることです。そこで、担当の学芸員たちは、その木曾馬の実施調査にも出掛けました。	
	(OL)	○木曾馬乗馬センター T②W 「木曾馬乗馬センター (長野県木曾郡開田村)」 調査を進める学芸員	(20分 26秒)	純粋な木曾馬の育成に取り組んでいる、木曾郡開田村の木曾馬乗馬センター こうして、学芸員たちは、展示シナリオにもとづいて、調査を積み重ねながら、実際に展示する資料の一つ一つを具体化していくのです。
	(WIPE)	○もとの会議室 学芸員たちが、打合わせしている。 T21W 「スケジュール調整会議」		調査が進み、展示資料のリストも次第に完成に近づいてきました。
	(OL)	○展示資料リスト 資料の種類・方法などの接写	この度の展示で使用することになった資料は、馬具や武器を中心に全部で三十点—	これらの資料は、館で所有しているもの、他所から借用するものとさまざまですが、新しく、この展示替えのために作られるものも少なくありません。
(OL)	○複製品の諸資料 《武人関係》	計画に従って、実物大の、古墳時代の武人の複製模型の製作が進められていきました。	また、木曾馬の実地調査にもとづいて、飾り馬の複製模型も作られていきます。 こうした複製模型の製作にも、学芸員たちの調査研究の成果が十分に反映されている	
(OL)	《飾り馬関係》			

M4 ↓	(WIPE)	(21分 56秒)	<p>○展示作業 撤去の作業—</p>	<p>ことはいうまでもありません。</p> <p>展示替えをする《古墳文化と科野》のコーナーの撤去の作業がはじまりました。このコーナーが、《科野の馬と武人》というテーマの展示に生まれ変わるのです。</p>	
		(22分 21秒)	<p>複製模型の設置作業—</p>	<p>いよいよ、資料の展示の当日です。</p>	
			<p>馬の模型の運び込み と設置—</p>	<p>まず、今回の展示の目玉ともなる複製模型が運び込まれてきました。</p>	
			<p>武人の模型の設置作業—</p>	<p>これらの模型は、当時の武具や馬具が、実際に、どのように使われていたかを、出来るだけ生き生きと伝えたいという担当の学芸員たちの願いをもとに製作されたものだけに、展示に当たっては、調査の結果にもとづいた正確さや分かりやすさが求められます。</p>	
			<p>馬具などの資料の展示—</p>	<p>複製品の展示が終わると、次は、その周辺に集めた展示資料のかずかずを配置していきます。</p>	
			<p>武具などの資料の展示—</p>	<p>資料だけだと、単調になりがちな展示も、こうして、複製模型とともに配置することで、全体が立体的となり、より説得力をもった展示となるのではないかというのが、担当の学芸員たちのねらいです。</p>	
			(OL)	<p>○完成した小テーマ展示「科野の馬と武人」</p>	<p>一日懸かりで、ようやく、展示替えの作業が終わりました。《古墳文化と科野》という小テーマ展示は、新しく、《科野の馬と武人》というテーマの展示に、生まれ変わったのです。</p>
		(OL)		<p>○変更以前の展示浮かんで消える。</p>	<p>この小テーマのコーナーの展示替えによって、《古墳に葬られた人々》という常設展示の中テーマのコーナーの全体が、生き生きとリフレッシュされることになったのです」</p>
		(WIPE)	(24分 32秒)	<p>○完成した展示—</p>	

M5

7	エピローグ	(1分43秒)
	<p>○学芸部一会議室 時代別研究会（原始時代）のメンバーが、新しい研究テーマを巡って討議を続けている。</p> <p>T22W 「小テーマ展示・企画会議」</p> <p>○モニタージュ 会議風景に重ねて展示コーナーのスチール写真が流れている。</p>	<p>N「さらに、新しいテーマのもとに、研究に取り組む学芸員たち」</p> <p>学芸員A「…開館三年目を経ましたので、この辺を大きく手直ししていこうというのが、今回のローテーションのねらいだと思いますね」</p> <p>学芸員B「今のお話しの圧倒されるという感覚は、こう非常に今の状況でもあるような気がするのですが、ちょっとくどいかなという。土器の数がね。あまりにも一杯あり過ぎて」</p> <p>学芸員A「やっぱり、ローテーションで新しい印象を植え付けるためには、展示手法をがらっと変えないとですね、その場面が大きく変化したという感じを、見学者に与えることが出来ないんじゃないかと思うんですね。だから、ある程度、大胆に考えていってもいいんじゃないですかね」</p> <p>学芸員C「例えば、土器の作り方だとかですね、使いかただとか、その辺りを、少しマルチメディアを使いながら、視覚的に、本当に動くものでね、来た人に見てもらいたいなそういうようなことも出来るかなと思うんですよね。まあ、体験学習なんかをやっているのを撮っておいて…」</p> <p>N「こうした研究を、継続的に続けていくことの中から、より新しい研究の成果が生まれ、それが、小テーマの展示替えへと繋がって、常設展示の全体が、絶えず、活性化されていくことになるのです」</p> <p>(26分15秒)</p>
8	終了タイトル	(42秒)
	<p>○「科野の馬と武人」の展示写真に重ねて</p> <p>—</p> <p>T23W</p>	

「学部教育教材作成研究会」

安藤孝一（東京国立博物館）

木下正史（東京学芸大学）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館）

須藤 護（竜谷大学）

永嶋正春（国立歴史民俗博物館）

早川智明（埼玉県立博物館）

長野県立歴史館

市川健夫（館長）

関 孝一（学芸部長）

阿部 勇（総合情報課長）

宮下健司（学芸員）

平林 彰（学芸員）

綿田弘実（学芸員）

メディア教育開発センター

福井康雄

高橋秀明

芝崎順司

宮本友弘

制作協力

(株) NHK エデュケーショナル

制作スタッフ

脚本・演出

福井康雄

撮影

田代啓史

照明

山田達也

技術

高橋信昭

制作進行

黒柳周一

(OL)

↓		学教教材教材 博物館学芸員の仕事 常設展示 終 (画面溶暗)	(26分 57秒)
---	--	---	--------------